

主題：よりよい未来を志向する子の育成（2年次）

副題：決める授業をデザインする

1 研究主題設定の理由

(1) 社会情勢

私たちが育てていきたいと考える子どもは、主体的に学んでいこうとする子どもであり、これから先の未来を切り拓いていける子どもである。自ら進んで学ぶことができる子どもは学校社会から巣立ってから、変化の激しい現代社会を生きぬき、社会の中においてもたくましく、学び続ける人となっていくと考えるからである。

様々な方法で情報を獲得することができる今、その多様な情報の中から、必要な情報を選択・判断し、目的に応じて活用できる力が必要となってくる。そのためには、子どものころから、自分にとって必要な情報を取り入れ、仲間とともに情報交換し合う中で、試行錯誤しながら解決する経験を積み重ねることが重要になってくる。

(2) 学習指導要領

平成 29 年 3 月公示の新学習指導要領では、これからの未来を切り拓くための資質・能力として、子どもに生きてはたらく「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」をあげている。これらの資質・能力を育むためには、各教科等において子どもが「どのような視点で物事をとらえ、どのような考え方で思考していくのか」という教科等ならではの物事をとらえる視点や考え方である「見方・考え方」をはたらかせて学びに向かうことが必要とされている。これは各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものである。

そのためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。子どもが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるように、今までの学校教育の蓄積を生かし、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めながら、取組を活性化していくことが重要であると述べている。

(3) 前研究「考える子」

本校では前研究の3年間「考える子を育む」を主題に研究を進めてきた。3年間の研究から子どもの「問う→考える→気付く」という考える過程の質や量が向上し、多角的な方法や視点から対象について考える姿が見られた。また、自他を認め、他者と協働しながら考えを更新する姿が見られた。さらに、学んだことや学び方の自覚だけではなく、友達や自分の変容や成長を自覚する姿や、自分から学ぼうとする姿、学んだことを他教科や生活に生かそうとする姿が見られた。

子どもは「問い」や「こだわり」をもちながら学ぶ過程で「学ぶ楽しさ」を味わうことが考える原動力となり「考える子」へと近づくことができた。このような子どもの姿からより「考える子」へと成長するためには、子どもの「もっと〇〇したい」という「こだわり」を実現するための力が必要となるのではないかと考える。

(4) 研究の目的

本研究の目的は、これからの未知なる状況を切り拓いていくためによりよい未来を志向する子を育成していくこととする。よりよい未来を志向する子を育成していくには、どんな力を子どもにつけていかなければならないのかを明らかにしていく必要がある。また、そのためには教師が単元や授業の中でどのようなはたらきかけをしているのかを考え実践していく必要がある。さらには、その実践によって子どもに必要な力を身に付けることができたのかを検証していくことも重要になってくる。そこで、本校の研究主題を「よりよい未来を志向する子の育成」とした。

2 研究主題 よりよい未来を志向する子の育成

(1) よい未来を志向する子とは

「よりよい未来」とは、「こうしたい」「こうなりたい」と願う今から未来へと進むべき自分や仲間の姿、生き方、価値観のことである。「志向する」とは、仲間とともに今を見だし、これから先へと考えをふくらませたり、行動したりしていくことである。つまり「よりよい未来を志向する」とは、自分が直面した課題や設定した目標をしっかりと把握して、その課題や目標に対して「自分がこうしたい」「こうなりたい」といった思いをもち、具体的にその姿をイメージし、今から未来永劫へと、仲間とともに試行錯誤をくり返して行動していくことである。

(2) よりよい未来を志向する

1年次の研究実践から、「よりよい未来を志向する」には次のような姿があることが明らかになった。

- 教師が子どもにとっての必要感、子どもの願いや思い、単元終末時の子どもの姿などをより具体的にイメージして、単元や授業を考えることで、子どもが課題や目標に向かって学び続ける原動力へとつながった。
- 教師が新たな視点を与えたり、他とのかかわりの場を設定したりすることで、子どもはいくつもの事象から物事を多角的に見て判断していく姿や、友達と思いや考えを共有しながら自分の作品や検証方法、考え方を見直し、よりよくしようと試行錯誤する姿が見られた。また、自分の思いや考えだけにとらわれるのではなく、チームやクラス全体のことを考え、その中でのよりよいものをつくり上げる姿も見られた。
- 教師が日常生活の中にある場面を想起した問題を提示したり、生活場面をふり返ったり、子どもの疑問を引き出す事象を提示したりすることで、子どもは追究の必要感が生まれ、自分の思いや考えを具体的にしてもつことができた。

本校では、これらの姿をもとに、「よりよい未来を志向する子」を次のように定義する。

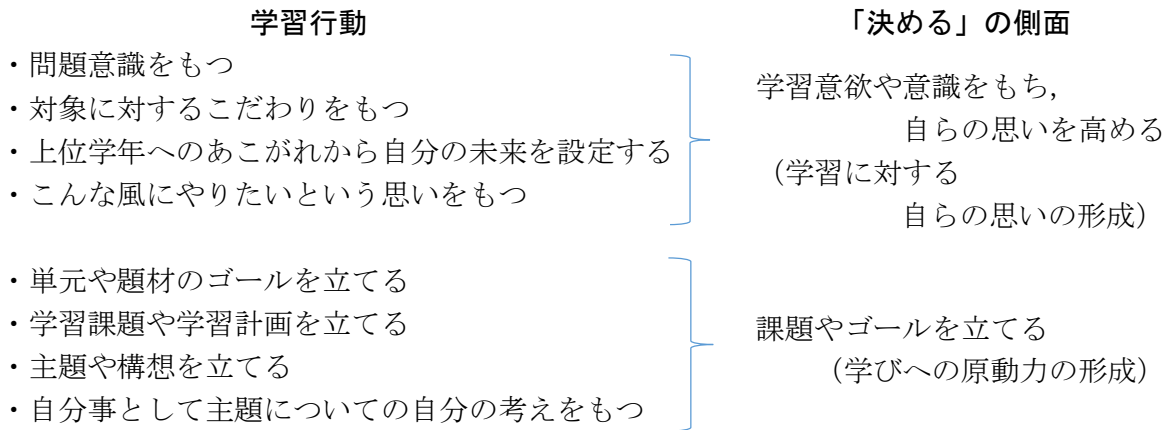
- ・学習に対する課題意識・目的意識をもち 学び続ける子
- ・友達と思いや考えを共有しながら 多様な視点から自らの思いや考えを更新する子
- ・今までの学びを実生活や実社会に広げ 自らの思いや考えを未来の自分へとつなげる子

3 副題 決める授業をデザインする

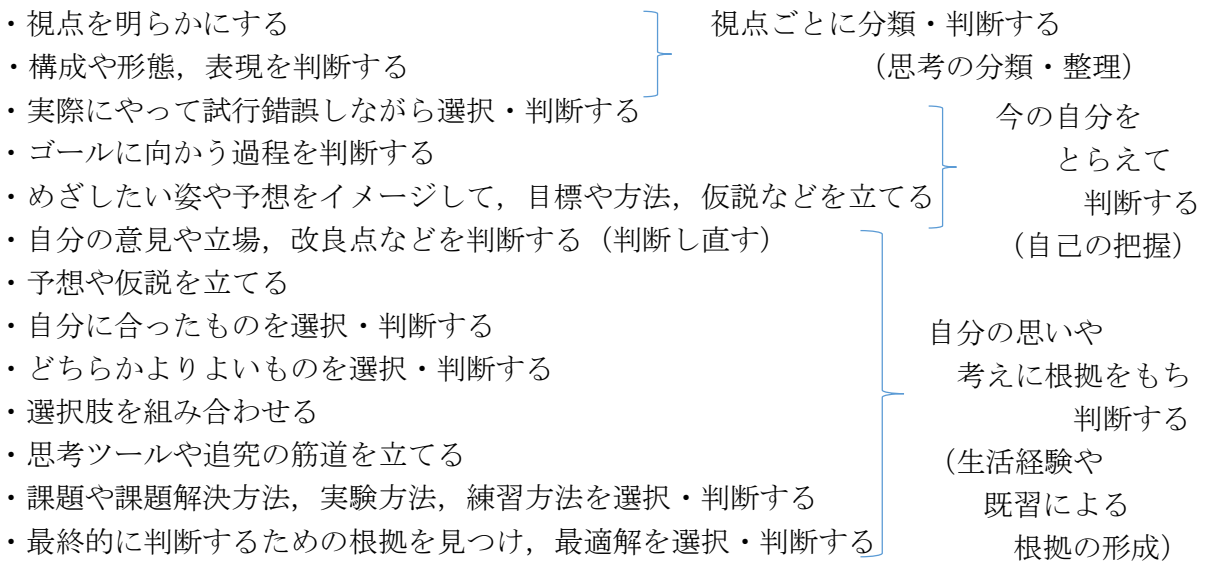
(1) 1年次「決める授業をデザインする」の研究成果

1年次に各教科で子どもが「決めたこと」を「決める」とは別の学習行動で表現し分類・整理していくと、次のような学習の流れと「決める」の側面が明らかになった。

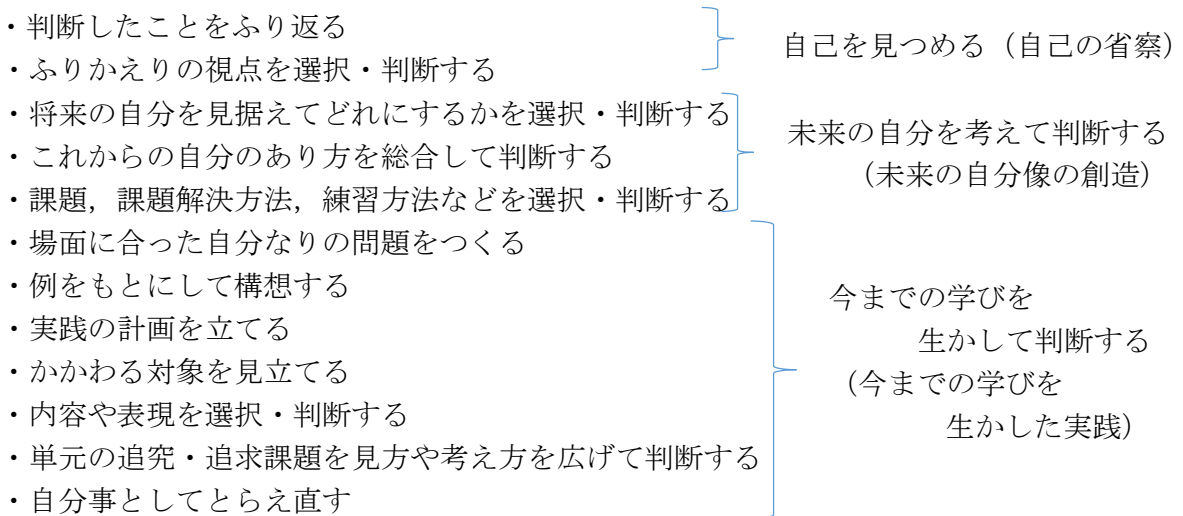
①課題やゴールを設定する過程で 学習意欲や意識をもち 学びへの原動力を形成する「決める」



②課題を追究・検討する過程で 学習過程や解決方法を多様な視点から根拠をもって判断する「決める」



③既習を生かす過程において 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」



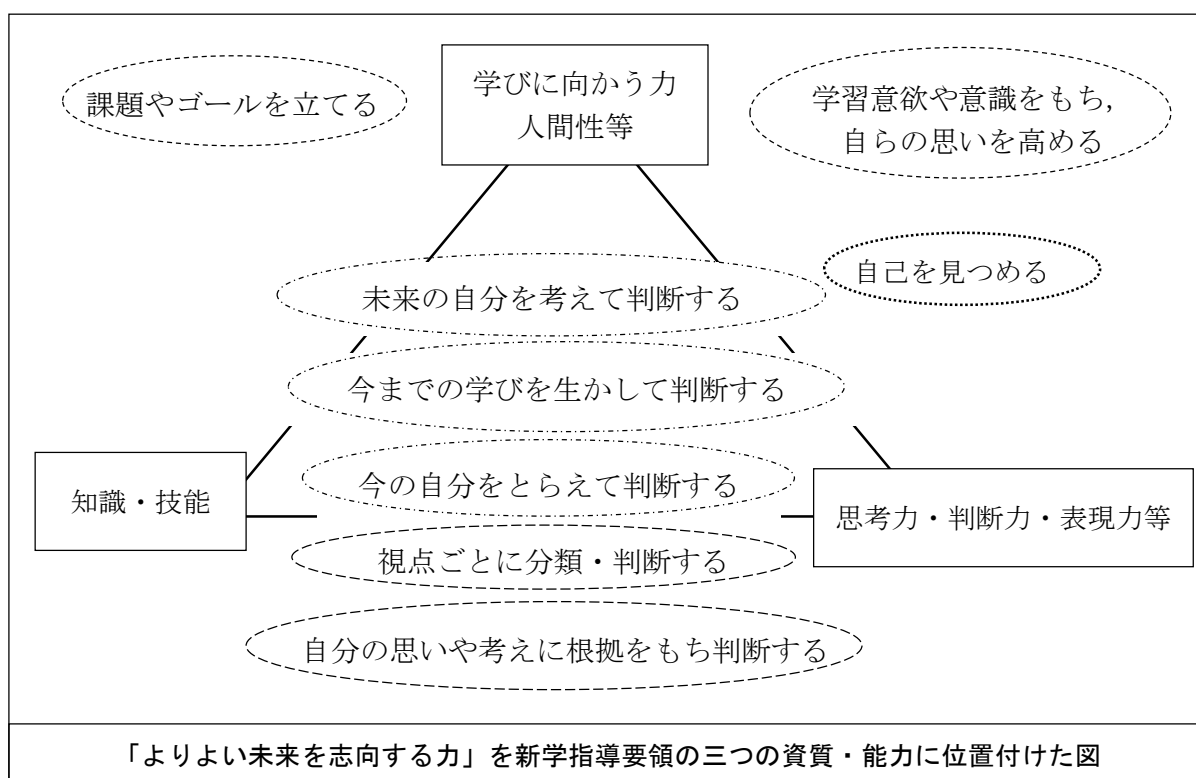
1年次は、よりよい未来を志向する子の育成のために、研究副題を「決める授業をデザインする」と設定し、子どもが決めることを意図的・計画的に授業を組み立てていくことでよりよい未来を志向する子が育まれるという仮説のもと、実践を重ねた。その結果、授業の中で「こうしたい」「こんな姿になりたい」という子どもの思いや考えから課題を見だし、そこへ向か

うために子どもが決めることをくり返していくことにより、よりよい未来を志向する子の姿が見られた。

このことから、子どもは生活とのかかわりを感じることができる事物や現象、自分にとって魅力のある作品との出会いによって解決や追究への意欲を高めていくことが明らかとなった。また、その中で自分の思いや考えを決めて、ゴールへ向かうための見通しをもつことやゴールを設定することで、多様な視点や考えが必要であることに気付き、友達や教師などと積極的にかかわり合い、自分の思いや考えをよりよく決めることに大きく関連していることを認識することができた。そして、決めたことをふり返ることで、自分の学んだことを実感し、自分の価値や考え方を決めることも大きく関連していることがわかってきた。

(2) 2年次における「決める授業をデザインする」

1年次の研究により、子どもが「決めたこと」を分類・整理してみると、「決める」を手段や方法として認識していたが、「決める」の側面が本校の主題にかかわってくる「よりよい未来を志向する力」そのものであり、子どもにとって求められている今必要な資質・能力との関連性が見えてきた。資質・能力とは新学習指導要領において述べられている、生きてはたらく「知識・技能」の習得、未知なる状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養のことである。よりよい未来を志向する力と新学習指導要領における三つの資質・能力の関係を以下のように位置付けた。



また、1年次の研究から各教科等によって、よりよい未来を志向する子の「未来」とは、いつのことをさすのか、そのとらえ方に差があることがわかってきた。今から明日へとつながる近い未来ととらえたり、今からさらに先の遠い未来のことを設定したりする教科が見られた。

これらの1年次の成果と課題を踏まえ、2年次の研究では、1年次で明らかになってきたよりよい未来を志向する力を単元や授業の中に取り入れていき、また、1年次のよりよい未来を志向する力の他にも新たによりよい未来を志向する力と言えるものがあれば、その資質・能力を単元や授業の中に取り入れていくこととする。よりよい未来を志向する力をよりよい未来を

志向する子どもの姿としてとらえ、このことを本校では「授業をデザインする」と定義する。子どもが学習へと学び続ける意欲や意識をもつことでこれから先の未来へと続く学びへの原動力となっていく。また、その原動力がもととなり、課題を追究・検討していく過程において学習過程や解決方法を多様な視点から自ら根拠をもって判断する力を育むことにもつながっていく。さらには、今学んだことをもとにして、今までの学びをふり返り、未来の自分に役立っていき力を培うことで、よりよい未来を志向する子に近づいていくと考えたからである。

子どもが「こんな自分になりたい」と未来の自分を想像する経験をくり返し行っていくことと、教師が「こんな力をつけたい」と未来の子ども像をもち続けることが互いに関連し合うことによって、よりよい未来を志向する子へとつながると考える。各教科で培った未来の自分に生かす力が他の教科でもかかわり合って、より未来を志向していく子どもの姿となっていくと考えられる。

そこで、2年次も引き続き副題を「決める授業をデザインする」とし、主題の「よりよい未来を志向する子」への姿へと近づいていけるように、各教科におけるよりよい未来を志向する子とはどんな子であるのかを再度確認して定義付けをし、検証していくことで、1年次よりさらによりよい未来を志向する子へと育てていきたい。

4 研究の取り組み

(1) 決める授業をデザインするための重点

決める授業をデザインするために以下の3点を設定し、以下の重点を意識しながら実践を重ねる。

① 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが学びへの原動力を形成するには、子ども自身が「知りたい」「やってみよう」という思いや考えをもち、学ぶ必要感や目的意識をもつことから始まる。単元や授業の導入の過程などにおいて、子どもが学ぶ必要感や目的意識をもつことで、子どもが自ら学ぶ意義を知り、その思いや考えを単元や授業を通して学習し続けていこうとする力となっていくのである。子どもが自らの学びへとつなげる意欲や意識をもたせるような授業を工夫していく必要がある。

② 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもが根拠をもって判断するには、生活経験や既習してきたことを想起させ、根拠をもって自分の考えをもつ必要がある。また、視点を明らかにしたり、視点を広げたりするには、他者とのかかわりが必要になってくる。他者とのかかわりから多様な考えにふれることで、子どもはもう一度課題を見直したり、既習で得た知識や情報を整理したり、新たに必要な情報を求めたりするのである。つまり、自分の思いや考えをもう一度とらえ直す機会が生まれ、自分の思いや考えを前よりも確かなものにしたり、更新したりすることができるのである。

③ 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

単元や授業の中で、自己を省察することで、「わかった」「できるようになった」という満足感や達成感を味わい、「次はできるようにになりたい」「次はこうしたい」という向上心や理想像をもつことへつながる。また、学んできたことを土台にして子どもがその学びを実践していくことで、その学びを実感することができる。学びが何に生かされているか、どんな力へと結び付いているのかを感じさせることで、学びの深まりや広がりを見だし、子どもは次の学びへとさらに向かうことができる。

(2) 検証方法

各教科等において、1年次の「決める」の側面で見えてきたよりよい未来を志向する力をもとにしながら、単元の流れや授業の中でよりよい未来を志向する子どもの姿と位置付け、「決める授業をデザインするための重点」をもとにしながら授業をデザインする。

また、そのためには、教師は単元や授業の中でどのようなはたらきかけが有効だったのか、その他にも有効な手だては何なのかを単元や授業を通して考え検証していく。

さらには、実践によって子どもによりよい未来を志向する子の姿が見られたのか、子どもの姿をもとに検証する。授業で見られた子どもの姿を分析し、各教科等においてめざす子どもの姿や各教科等の特質に応じた「よりよい未来を志向する子」を追究していく。